

吉江藩とその城下町

伊豆蔵 庫 喜*

A Study on Yoshie Castle town and sites of town houses.

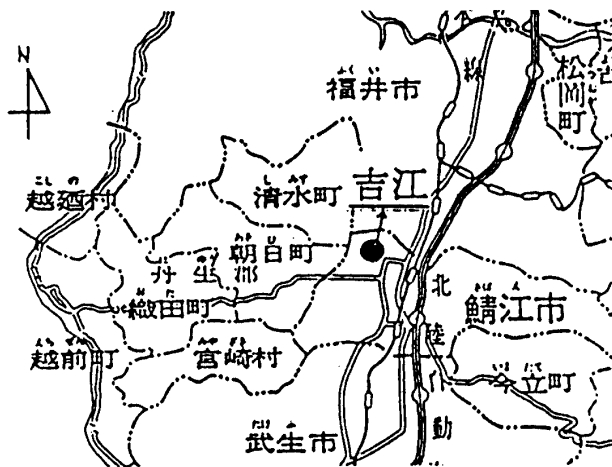
Kouki IZUKURA

There was a castle town in Yoshie (in Sabae city of Fukui pre). It was controlled by Masachika Matsudaira who was the first lord of Yoshie clan, between 1648 and 1678 in Edo period. There were 137 sites of the marchant house in this town. The standard length of the front of their sites was from 4 ken to 6.5 ken (1ken=1.8m). The depth of them was from 14 ken to 16 ken. Their two standard lengths resembled to them of Fukui and Matsuoka castle town.

1. はじめに

福井市の南方約15kmにある鯖江市の北西部に位置する吉江町は、慶安元年(1648)から延宝2年(1674)まで吉江藩の城下町であった〈図-1参照〉。吉江藩は17世紀後半期のわずか26年存続しただけであった。そのため当時の御館や武家屋敷は現在ではまったく残っていない。しかし、旧城下の通りはほぼそのまま残っており、それに面して古さを感じさせる建物や町並みもわずかながらみられる〈写真-1参照〉。

本稿は史料や絵図を用いながら、藩政時代の吉江藩とその城下町について検討し、合わせて福井・松岡城下との比較・考察を行うものである。



〈図-1〉吉江町の位置



〈写真-1〉吉江町の町並み

*建設工学科 建築学専攻

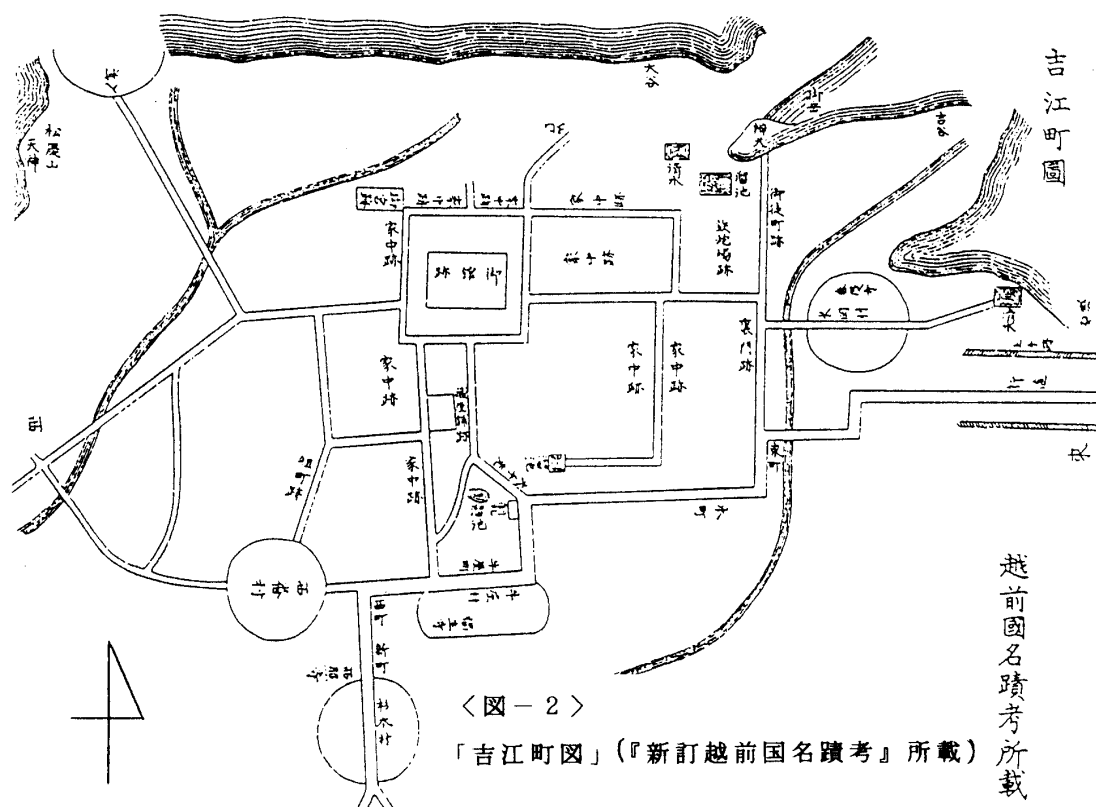
2. 吉江藩の沿革

吉江藩は、福井藩3代藩主松平忠昌公の第3子昌親公が正保2年(1645)に福井藩より2万5000石を分封されて成立したもので、慶安元年(1648)に幕府より藩を開くことを許可されている(註1)。藩領は、立待郷(6町7ヶ村)田中郷(12ヶ村)坂井郷(9ヶ村)足羽郷(4ヶ村)大野郷(2ヶ村)吉田郷・南条郷(各1ヶ村)の合計6町36ヶ村、石高は2万5000石であった。この吉江藩の中心町であった吉江の地は、生産性の低い土地であったため、昌親公は水捌けの悪い土地を開墾して、水利を図り農地の開拓など行ない、商工業についても、鍛冶屋・紺屋や木綿の織物職人などを育成したと伝わっている(註2)。しかし、延宝2年(1674)に昌親公は兄の光通公の跡を受けて、福井藩5代藩主の座につき、吉江から福井へ移った。それに伴い、御館や武家屋敷も取り払われている(註3)。つまり吉江が城下町として存在したのはわずか26年に過ぎなかったのである。

3. 城下町の構成

〈図-2〉は『新訂越前国名蹟考』に掲載されている「吉江町図」である。城下の北西寄りに藩庁でもあった御館があり、その東から南にかけて家中屋敷や組屋敷があった。そして町人屋敷は町の東から南西にかけてあり、城下町特有の七曲りの道路に沿って新町・西町・牛屋町・本町・東町・柳町の6町からなっていた。町の境界は通りの曲角で区切られていた。

吉江藩の中心町としてこの場所が選ばれたのは、東に叔父君忠直公が開かれた鳥羽八町の北陸道が走り、西に日野川が流れていて水陸の便がよく、地理的に要衝の地であったためと思われる(註4)。



〈図-2〉

「吉江町図」(『新訂越前国名蹟考』所載)

越前国名蹟考 所載

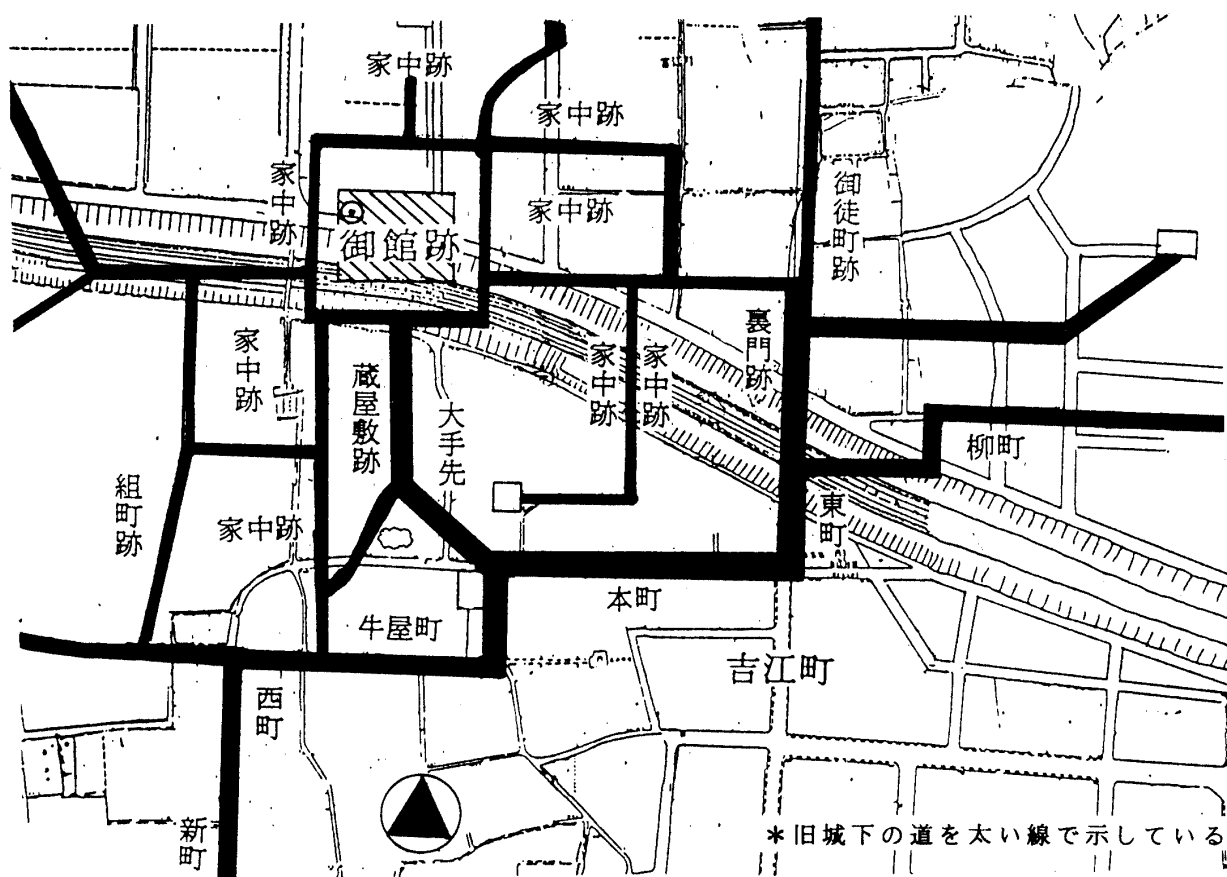
4. 御館の様子

(1) 御館の沿革について

昌親公の住居であり、藩庁でもあった御館は、慶安元年(1648)から建設が始められ、明暦元年(1655)に完成した。そして直ちに昌親公が御館に入られた(註5)。御館の大きさは約1万2000坪で、周りに壕などは無く、築地塀を巡らせただけの質素な構えであったと伝わっている(註6)。しかし前述したように、延宝2年(1674)に福井藩5代藩主に成られたため吉江から福井へ移られた。それに伴い御館の一部も福井城に移築され、昌親公の住居となったという(註7)。

(2) 御館の位置について

御館は、米岡村の一部と牛屋村の竹藪や畑地の丘陵地にあったと伝わっている(註8)。このことは前掲の「吉江町図」からもあきらかである。「吉江町図」を現在の地図に落としたものが〈図-3〉である。これをみると御館の位置は現在の浅水川のちょうど真ん中に相当している。つまり、旧御館跡の大部分は大正年間に行われた浅水川改修工事で削り取られてしまったことになる。今は御館の北西隅部にあたる公民館敷地内に御館跡の石碑が建っているだけである。ところで、現在吉江町在住の小山喜平氏によると改修工事の際、東南方向に約200mの石列が発見されたという。この石列を御館の外部の一辺とみなせば110間余となる。御館の敷地は図にみるようにほぼ正方形であり、坪数は伝えられている約1万2000坪に近いものになる(註9)。



〈図-3〉 吉江城下と現在の比較

5. 家中屋敷の様子

御館の東から南にかけて位置していた家中屋敷については詳しいことはわからないが、昌親公が吉江に入られた際、皆川多左衛門を筆頭に41名の重臣がいた（註10）。しかし御館同様、昌親公が福井へ移る際に家臣達も吉江を離れ、それに伴い家中屋敷も取り払われてしまった。

6. 町屋敷の様子

(1) 史料について

吉江城下に関する17世紀当時の史料はないが、明治期のものが小山喜平家（吉江町）に残っている。それらは、屋敷地の規模が分かる『無税地代価歩積取帳』（史料1・註11）と、町屋敷の様子が分かる『吉江町絵図』（史料2・註12）などである。ここでは『吉江町絵図』を基本とし、これに『無税地代価歩積取帳』を対照させながら、当時の町屋敷の間口・奥行きの復原考察を行なう。

(2) 町屋敷の復原について

吉江の城下も当初は他の城下町と同様、町屋敷はほぼ均等に分割されていたものと思われる。ところが、史料1・2に示されている明治期における間口の大きさは、かなりのバラツキがみられる。これは後に合筆や分筆があったためと考えられる。城下の中心部にあたる牛屋町・本町・東町では、5間1尺2寸が21筆で最も多く、次に多いのが6間1尺4寸の11筆である。また、これらの寸法の倍あるいは1/2の大きさをもつ例もあり、これらが合筆や分筆の結果生じた町屋敷と考えることが出来よう。したがって町の中心部の牛屋町・本町・東町では、当初の町屋敷の基準間口寸法は5間1尺2寸および6間1尺4寸であったと考えられる。ところが新町・柳町では、間口が5間1尺2寸および6間1尺4寸の例は1筆もない。また、西町にもほとんどみられず、これら3町では特に定まった基準寸法がなく、ほとんどが4間～5間前後になっている。

いっぽう奥行き寸法については、詳細は明らかにできないが、当初の状態と明治期の状態に大きな変化はなかったと考えられる。以上のような考察を加えながら、藩政当時の城下の町屋敷割を推定・復原したのが〈図-4〉である。

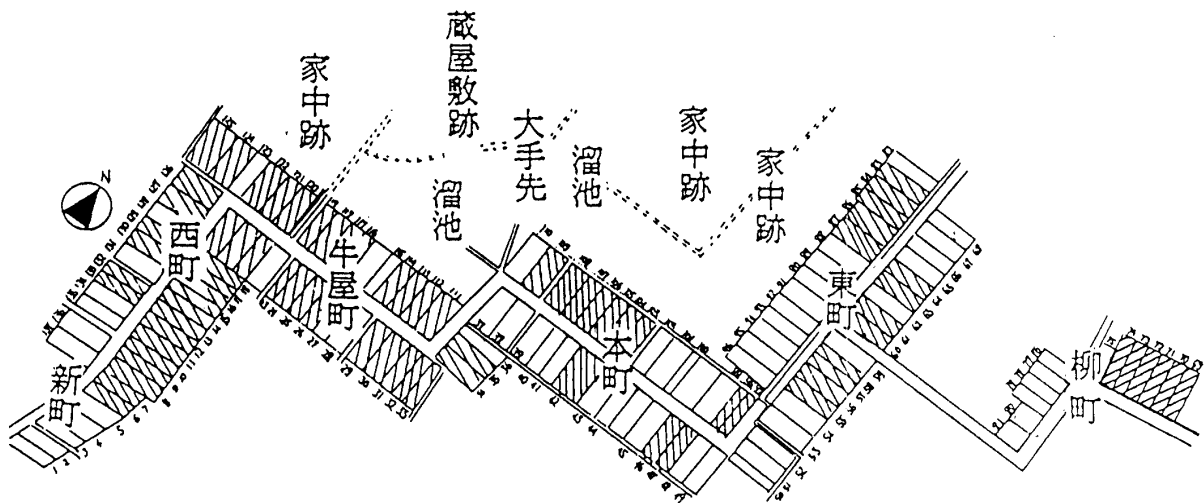
(3) 藩政時代の町屋敷地について

(イ) 敷地数について

明治期における町屋敷の数は吉江6町全体で97筆となっている。各町別には新町が6筆、西町が14筆、牛屋町が17筆、本町・東町がともに26筆、柳町が8筆である。

いっぽう〈図-4〉に示した町屋敷の復原図によると、藩政時代の町屋敷地の総数は137筆となり、明治期に比べても40筆ほど多くなっている。町別にみると、新町が7筆、西町が25筆、牛屋町が31筆、本町が28筆、東町が33筆、柳町が13筆となり、特に西町・牛屋町で合筆例が多かったことがわかる。

〈図－４〉 吉江城下の町屋敷図（復原図）



*斜線部はそれぞれの町の基準となる
間口をもとに分割した敷地を表す

(ロ) 敷地寸法について

〈表－１〉は各敷地の間口、奥行き寸法を集計したものである。

まず間口寸法については、５間～５．５間が５７筆（４１．６％）で最も多く、これに次ぐのが４間～４．５間および６間～６．５間のそれぞれ２５筆（１８．２％）である。つまり４間～６．５間の例が全体の８割近くを占めている。以下４．５間～５間が１３筆（９．５％）７間～７．５間が９筆（６．６％）と続き、８間以上が３筆（２．２％）で、４間未満が５筆（３．７％）となっている。

いっぽう奥行き寸法については、１５間～１６間が６７筆（４９％）と最も多く、これに次ぐのが１４間～１５間が３３筆（２４％）である。したがって１４間～１６間の例が全体のほぼ７割を占めていること。この他１６間～１７間が１８筆（１３％）と続き、１８間以上が４筆（３％）で、１０間未満が３筆（２％）となっている。

〈表－１〉吉江城下の町屋敷地寸法（間口×奥行）

単位：間

奥 行 間 口	間 口																				合 計	比 率
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20 以 上	
0.0～0.5																					0	0.0
0.5～1.0																					0	0.0
1.0～1.5																					0	0.0
1.5～2.0																					0	0.0
2.0～2.5																	2				2	1.5
2.5～3.0																					0	0.0
3.0～3.5																	2		1		3	2.2
3.5～4.0																					0	0.0
4.0～4.5									1		4		3		6	11					25	18.2
4.5～5.0												2				10	1				13	9.5
5.0～5.5														17	26	10	1	3			57	41.6
5.5～6.0																					0	0.0
6.0～6.5							2						1	7	8	7					25	18.2
6.5～7.0																					0	0.0
7.0～7.5													1	3	5						9	6.6
7.5～8.0																					0	0.0
8.0以上																3					3	2.2
合 計	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	4	0	7	0	33	67	18	2	3	0	137	100.0
比 率																48.9						

さらに間口と奥行きの組み合わせをみると、間口5間～5.5間・奥行き15間～16間の例が最も多く26筆ある。この他、間口5間～5.5間・奥行き14間～15間の例や間口4間～4.5間・奥行き15間～16間の例がそれぞれ17筆・10筆みられる。したがって間口4間～5.5間・奥行き14間～16間の範囲の例が70筆であり全体の7割を占める。ただし、これらのほとんどは町の中心部である牛屋町・本町・東町にある屋敷地である。

(ハ) 町別にみた敷地寸法について

〈表－2〉は、町別の間口の分布を集計したものである。各町の町屋敷の間口は、町の中心部にある牛屋町・本町・東町では5間～5.5間の例が、それぞれ約5～6割を占めている。いっぽう町の端に位置する新町・西町・柳町では、町の中心部にあるよりやや小さいが4間～5間に集中している。

〈表－3〉は、同様に奥行きについて示している。各町の町屋敷の奥行きは、西町・本町・東町・柳町では15間～16間が最も多くみられ、中でも西町は25例すべてがこの例である。また牛屋町では前述した町よりやや小さく、14間～15間で、西町と同様、31例すべてがこの中に含まれている。ただし、新町だけはすべて12間～13間で、他の町より小さめである。

単位:間

町名	新町	西町	牛屋町	本町	東町	柳町	合計
以上～未満							
0.0～0.5							0
0.5～1.0							0
1.0～1.5							0
1.5～2.0							0
2.0～2.5		1		1			2
2.5～3.0							0
3.0～3.5				3			3
3.5～4.0							0
4.0～4.5	3	8	6		3	5	25
4.5～5.0	2	4			1	6	13
5.0～5.5		5	17	13	22		57
5.5～6.0							0
6.0～6.5	1	3	7	5	7	2	25
6.5～7.0							0
7.0～7.5	1	4	1	3			9
7.5～8.0							0
8.0以上				3			3
合計	7	25	31	28	33	13	137

〈表－2〉

吉江町・町別表間口寸法

単位:間

町名	新町	西町	牛屋町	本町	東町	柳町	合計
以上～未満							
0～1							0
1～2							0
2～3							0
3～4							0
4～5							0
5～6							0
6～7						2	2
7～8							0
8～9						1	1
9～10							0
10～11						4	4
11～12							0
12～13	7						7
13～14							0
14～15			31	2			33
15～16		25		18	18	6	67
16～17				7	11		18
17～18				1	1		2
18以上					3		3
合計	7	25	31	28	33	13	137

〈表－3〉

吉江町・町別奥行き寸法

7. 吉江城下と福井・松岡城下との比較

以上で得られた吉江城下の町屋敷の結果と福井および松岡の城下と比較してみると〈表－４〉のようになる。福井城下は『御城下四ッ割之図』（註13）、松岡城下は『松岡町家数間之帳』（註14）を参考にしている。

〈表－４〉からわかるように間口は、福井城下の中心部にある町屋敷は４間～４．５間が最も多く、松岡城下でも４間～４．５間が最多になっている。吉江城下の場合は、先にみたように間口寸法は５間～５．５間が最も多く、間口については福井・松岡城下よりやや大きめであるといえよう。

いっぽう奥行きは、福井城下の中心部にある町および松岡城下ともに１５間～１６間の例が最も多い。吉江城下の場合も１５間～１６間に集中していることから、各城下とも奥行きについては似通っている。

さらに間口と奥行きの組合せは、福井城下の中心部の町および松岡城下では間口４間～４．５間・奥行き１５間～１６間の例が最も多い。しかし吉江城下では間口５間～５．５間・奥行き１５間～１６間であり、福井・松岡城下と比べてやや広めである。

〈表－４〉 吉江城下と福井・松岡城下の町屋敷寸法との比較

	吉江城下の町屋敷地寸法	福井城下の町屋敷地寸法 上・全体（下・中心町）	松岡城下の町屋敷地寸法
最も多い間口寸法	５間以上 ５．５間未満	３間以上 ３．５間未満 (４間以上 ４．５間未満)	４間以上 ４．５間未満
次に多い間口寸法	４間以上 ４．５間未満 ６間以上 ６．５間未満	２間以上 ２．５間未満 (３間以上 ３．５間未満)	５間以上 ５．５間未満
間口寸法の平均	５．２３間	３．３７間 (４．３０間)	５．１９間
最も多い奥行き寸法	１５間以上 １６間未満	８間以上 ８．５間未満 (１５間以上 １６間未満)	１５間以上 １６間未満
次に多い奥行き寸法	１４間以上 １６間未満	１０間以上 １１間未満 (１３間以上 １４間未満)	６間以上 ７間未満
奥行き寸法の平均	１４．６０間	１０．０１間 (１３．２６間)	１３．２９間
最も多い組合せ	間口 ５間以上 ５．５間未満 奥行き １５間以上 １６間未満	間口 ３間以上 ３．５間未満 (４間以上 ４．５間未満) 奥行き ９間以上 １０間未満 (１５間以上 １６間未満)	間口 ４間以上 ４．５間未満 奥行き １５間以上 １６間未満

8. 結語

以上のように、吉江藩の沿革および御館を中心とした城下町について報告した。さらに旧吉江城下の位置を現在の図に示すとともに、当時の町屋敷図を復原・作成した。なかでも注目されるのは町屋敷の大きさである。吉江城下の町屋敷地寸法は、間口5間～5.5間・奥行きが15間～16間が標準とみることができる。また福井・松岡城下の町屋敷と比べると、間口がやや大きめといえるが似通っている点も多い。特に松岡城下町は昌親公の兄、昌勝公がほぼ同じ時期に建設した町であり、吉江城下と松岡城下は建設に際してお互いに強い関連性があったものと思われる。

おわりに／この小論を作成するに際しては、吉田純一氏（福井工業大学）のご指導を受けた。なお資料の蒐集には、小山喜平氏ならびに吉江公民館に協力を賜わった。また、炭谷昌平・藤沢利雄（当時福井工大4年・吉田研究室）両君に調査や資料整理の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。

言主

- 1) 『吉江神社・おたまやさん』による。
- 2) 註1と同じ。
- 3) 『続片断記 上』に「延宝二寅年五月七月福井御家督、此年より吉江御館御引御新宅建、并侍屋敷瑞源寺御引取、（後略）」とあり、御館や家中屋敷も福井へ移されている。
- 4) 註1と同じ。
- 5) 『続片断記 上』に「一、明暦元未年六月廿一日吉江御入部」とあり、昌親公が吉江に入ったのは、明暦元年(1655)であることがわかる。
- 6) 註1と同じ。
- 7) 註3参照。
- 8・9) とともに註1と同じ
- 10) 『続片断記 下』の延宝3年の吉江給帳に「千石 皆川多左衛門、六百石 高屋伊織、四百石 浦五十左衛門、（後略）ゞ知行衆四十一人」とある。
- 11) 明治7年3月における吉江6町の町屋敷地の規模（表間口・裏間口・奥行き・坪数）地名、地代金などを6町別に書き表わした記録である。
- 12) 明治6年における吉江6町の位置関係、各屋敷地の様子、面積、道路、水路などを書き表わした記録である。
- 13) 玉置伸悟・押谷茂敏「御城下四ッ割之図からみた福井藩町屋敷地について」（北陸都市史学会報 No9 1987.8）
- 14) 中村進治郎家所蔵 元禄十年(1697)六月の年紀がある。なお松岡城下の町屋敷については、下野洋一・吉田純一「松岡城下の町屋敷」（日本建築学会北陸支部研究報告集 1990-7）がある。

(平成5年12月3日受理)